二〇〇一作では国王の葬送行列が扱われ、権標を背びした肖像と納棺された遺体の二重性が、『王の二つの身体』の象徴であるといわれる。ルフ・ギゼイ説を基にした解釈が盛んで、肖像を彷彿とさせるという意見もある。ファイルのポイントは、アルン・プロユのミュエール・ギゼイ説においては、アルン・プロユミュエール・ギゼイ説の批判が必要である。評者は、儀礼の意味は、それを見る公衆に理解されるものである必要があるという見解を支持し、それを強くした次第である。評者の誤解による批判もあるだろうが、著者の説を疑わないとともに、今後の議論の展開に期待したい。（二〇〇六年八月）
小山啓子著『フランス・ルネサンス王政と都市社会』（二〇〇〇年三月）

本書は、フランスの都市リヨンを対象として、ヨーロッパ近世都市を論じた著者の学歴論文であり、既発表の個別論文を集めた論文部分。（五章）に簡潔な序論と結論を付している。まず各章の内容を眺めよう。序論では、研究状況の整理が行われている。都市史はこれまでで主として十二～十三世紀の都市史、十四～十五世紀の『良き都市』を論じた著者の先代論文であり、既発表の個別論文を集めた本論部分。（五章）に簡潔な序論と結論を付している。まず各章の内容を眺めてよう。
ことのまぬけ、新しい社会史・心理史的アプローチをもってはじまった。著者は言う。他方、都市と政治体制との関連について、著者は、ムーニー以来の研究を踏まえて、王権は地方との連携を図り、各社団との合意を求め、これに対して地方社会・都市は独特の仕方で対応したことを強調する研究動向に注目するところである。それが国研究状況はどうか。社会史的研究の隆盛があるものと言う。十六世紀都市の独自性が提げられていなかったが、それは王権が「見せる王権」を見せて合意をとるルネサンス王政の特徴である。著者は「六世紀の王権をトレヴァー・ローバーとメジャーニによりつつルネサンス王政」と捉える。ではこの王政の直接的な対話を、そして支配領域の広さと多様性から地方の自律性と分権性の容認を余儀なくされ、その結果王権は統治の正当性の可視化であり、「見せる王権」を示すものである。ルネサンス王政は、集権的統治形態とは違って表心の不確かな特徴である。著者は言う。すなわち、政治の中心の宮廷が移動したのである。移動の過程で各種の政治・行政行為が実行されるが、とりわけ、多様な視野をもつった儀礼としの巡幸が重要で、これによって王は地方の諸権力と直接的に対面して体制への支持を獲得し、それを通じて王位という抽象的な観念が人びとの前に具体化し、巡幸の具体例として、シャルル九世と王母カトリーヌ・ドゥ・メディチスの二年三ヶ月間にわたった巡幸を「国王シャルル九世の旅の記録集」によって具体的に紹介している。第2章「十六世紀前半の『良き都市』リヨ証」では、中世都市と近世都市の狭間にあって、そのいずれも異なるタイプの都市を対象化するために、著者は「良き都市」の概念を採用する。この概念は歴史概念としての意味を有し、研究上の諸説があるが、著者はドイツ語調を下敷きにして、まず軍事・財政的観点である都市、とその特徴を説明している。その事例として検討されるのがリヨ証である。ここには高等法院も大学もないが、王からの大市の特権授与によって発展し、
十六世紀前半に著しい人口増加（初頭に二％、半ばまでに四二％の増加）が見られ、六万余に増加した都市空間に新たに市壁建設が必要となった。この工事は、資本源として徴税権の付与、人員の提供、建築家の派遣など王権の強い後援のもとに実行された。一四九五年の令令によって市参事会（十二名）の存在が認められた。富裕商人からなる審議委員会に対する対応を講じる際には、国王権の同盟を得た市民集会や土地所有者・同職組合長による約二百名からなる「市会」などがあった。

ヨーロッパには市参事会を中心とした都市側の組織と並んで王権側の組織があり、制度的には二元的構造をなしていた。王権の役人として、非常駐であるサレコネール代理以下の諸役人がおかれ、常務としてセネシャルが国王から任命参事会へ、収入役・道路管理官の守備隊長が取り扱うなど、この二つの系列は制度的にも全く相違していた。都市の内部は民兵の組織基盤をなす街区に区分され、これは管理されていたが、やがて、街区に王の軍事役人が配置され、それに通じた命令が下された。リヨンはトボラフィックに見るとソーニーヴェルの一河岸と左岸に開発、両岸をつなぐ橋の周辺に富裕層が集中し、貧民層は周辺部に分布していた。人口・職種の増加に伴う、激しい物価上昇とともに、貧富の格差が顕著となり、それは当時の物価変動を背景として大きな影響を及ぼした。

第十二章 [都市と王権] 『対話』 国王入術式。この時期に入術式は本質的な役割を果たし、その重要性を示した。入術式は歴史的に見るとは密接に関係しているが、都市の特権の確認を授与するという意味での役割を果たす。入術式は王権と市民の関係を強化し、市民の教養を高め、市民の明白に伝わる形をとる。入術式はもはや宗教的要素を欠き、十六世紀に入ると、人文主義的影響のもとに、壮大な装飾などを用いた世俗的儀礼の色彩を強める。
市門の鍵の面、服従の宣誓、特権付与の要請・国王からの付与の確認、鍵の手渡し、国王の入場という順序で行われた。このとき要請・確認された特権は、都市の鍵の保持、都市の開催、都市特権、市参事会による徴税権、（間接税・塩税・入税、自衛権、組織物業者の運営権等）である。こうして、入市は王権と都市との政治的契約の儀礼的演出として行われた。

市方は王権と都市との政治的契約の儀礼的演出として行われたが、服従の宣誓は市参事会の承認と市参事会による特権を前提としている。市参事会は市方の主導権を維持するために、都市と王権との間の協定を結び、都市の経済的成長を促進するための規制を定めている。

その後、王権は都市に対する政治的契約を強化するために、都市の経済的成長を促進するための規制を定めることが必要である。都市の経済的成長を促進するために、都市の経済的成長を促進するための規制を定めることが必要である。都市の経済的成長を促進するために、都市の経済的成長を促進するための規制を定めることが必要である。都市の経済的成長を促進するために、都市の経済的成長を促進するための規制を定めることが必要である。
借金、参事会員の私財による経済が常態化し、他の要因も加わって、都市の財政運営が一挙に悪化していた。

宗教戦争の中でリヨンは無尽蔵され、参事会の財政問題や都市の労働問題、旧教派の乱を含む不安定な情勢となり、内部対立は激し、都市財政問題は一層深刻化していった。この中で、参事会は旧教派と新教派の間で戦った結果、新教派が上風を占めた。リヨンの財政問題は、大規模な都市建設計画の中断を招き、さらに都市財政の悪化を加速させた。

一方、都市の財政問題は、市長と参事会の間で対立が激化した。市長は財政改善のための改革を図り、参事会はこれを拒否した。このため、都市財政は一層悪化し、市民の生活も大打撃を受けることとなった。

このように、都市の財政問題は、参事会の財政問題、旧教派の乱、都市建設計画の中断、市民の生活の悪化など、多様な要因で悪化した。
藤本幸二著「ドイツ刑法の啓蒙主義の改革とPoema Extraordinaria」（19世紀法制史の要著①）

本書のタイトルに含まれるPoema Extraordinariaという概念は、わが国では一般に「特別法」または「不正規法」と解され、本書の訳に沿ってPoema ordinaria（正規法）と区別される。

すなわち、特別法の設定は、法制度の面において、ある状況や場合において通常法が適用されない場合に適用されるものである。